孫と爺爺のオリエンテーリング　NO29

渡辺　幸（M12、小6）・武石雄市（M65、68歳）

爺爺は前号で約束どおり、孫を厳寒のスウェーデン　スキー合宿に同行した。
孫は海外初遠征なのに次から次に起こるトラブルに巻き込まれる。
スキーO大会で友達（ライバル？）も出来た。
経験は人間を育てる！
この経験は後日きっと役に立つだろう。

成田空港でのトラブル

爺爺と幸は空港近くの民間駐車場に車を置いてスカンジナビア航空が発着する第2ターミナルに着いた。

格安チケットなので空港カウンターで受け取ることになっている。

トラブルその①　発券済みの幸のチケットを見たら、性別がMS（女性）になっている。係りの女性から「このチケットでは搭乗できません。予約いただく時にパスポートのコピーは提出いたしましたか？」「帰りのこともあるので調べますからここでしばらくお待ちください」

搭乗時間まで未だ余裕があるので爺爺は平然としているが、幸は「ぼくどうなるの？」と幸先を心配している。程なく別の係り（JTB）が駆けつけ、平身低頭に謝りながら、このチケットで往復できることになった。

トラブルその②　手荷物カウンターで荷物が重量オーバーになった。爺爺はスポーツ道具（スキー）だし、3人分（爺爺、幸、美和）で測って下さい、と頼んだが「前の方の荷物はすでにコンベアーで通過いたしました。本日は生憎満席でございまして、超過料金は2万7千ほどでございます」と、事務的である。

爺爺「何kgの超過ですか」係り女性「3kgでございます」爺爺「わかった。ワックスを捨てるからさっきのトラベルケースを返してくれ」係り女性「先ほどの荷物はコンベアーで運ばれました」残っているのはスキーケース

と堀江君へのお土産（りんごとみかん）が入ってる軽い方のケースだった。スキーケースの中にも余分なものは詰まってる気がするが手間がかかるし、かといってお金を払うのももったいない、爺爺「わかった。このケースから3kg取り出します」と、手早く土産のりんごとみかんを取り出したらちょうど3kg、爺爺は堂々と機内持ち込みした。航空機の全備重量（機体と搭載燃料、搭乗人員と全積載荷物の重量）は軽減されないで手荷物超過代は負担しない妙案で無事解決した。

アーランダ空港のトラブル

3人はコペンハーゲン（デンマーク）で航空機を乗り継ぎストックホルムに着いた。コペンで乗り継ぎ時間が1時間だけだったので荷物の積み替えが心配だった。心配の予想は的中！3人で5個の手荷物だったが、同じ便で到着したのは美和さんのバックが1個だけ。回りを見ると日本からの乗り継ぎした10名ほどの荷物が積み替えされなかったようだ。ターンテーブルの前で次便を待つこと1時間、幸のケースが到着。残りの3個はホテルに届けるらしい。しかし、当日中に届けられたのはスキーの2個。爺爺のケースは翌日だった。5個の荷物が2日間4回に分割して輸送された。そういえば、エストニアのタリンでもそんなことがあったっけ・・

車両の検問

Moraへは大型のレンタカーを駆って大凡320㎞。交差点はロータリー、スピード規制も独特の合理的な区分で70㎞～110㎞。巡航速度は120㎞～130㎞で快適に飛ばした。

長い直線道路を120㎞で走行中突然、ポリスがストップの旗を振って側道に誘導している。スピードだってオーバーしていないし、恐る恐る運転席（左側）のウィンドーを下げた。美和さんの通訳(英語)によって国際免許証・運転免許証・パスポートの提示を次々と求められた。単なる検問に引っかかったのだ。

我々の前に大型トラックがやはり検問を受けていたが、彼は何か運送上の欠陥が発見されたのか私の先にはスタートしなかった。

スウェーデンでレンタカー運転は2回目だが、検問は初めてだった。

孫のスキー合宿1週間の感想文。

ノンポールで片足スキー練習

スウェーデン合宿

渡辺　幸

1月2日朝、4時に起きて成田空港へ行き飛行機に乗ってスウェーデンの首都ストックホルムへ行きました。

次の日モーラというところに行き、そこでモーラに留学している堀江君の寮に着きました。午後5時、早速近くのスキー場でクロスカントリースキーをやりました。真っ暗だがコースに電気は点いている。ぼくとじいじいは初日からどっかに行って迷ってしまい大変なことになりました。1時間は滑ったのでかなり遠くに来てるだろう、こっちに来る人がいたのでスキースタジアムまでのコースを聞いてやっと帰りました。寒い(マイナス17℃)のでとてもつらかったです。

合宿2日目は午前中にギアⅢ（スーパースケーティング）の練習を教えてもらいました。簡単に言うとスーパースケーティングは片方の足にしっかり乗るための練習でした。これで僕も片足に乗ることができ、スーパースケーティングがちゃんと出来ました。午後は軽く一時間、午前の復習をしたりどっか適当に走ったりして一時間を過ごしそしてショッピングへ行きました。

インタースポーツに行ってクックスとか寒さをしのぐマスクがあったりしました。夕ご飯はとても大きなピザを食べました。いろいろな種類をみんなで分け合って食べました。

合宿３日目は午前中堀江君からダブルポールとギアⅡ（クイック）を習いました。「ダブルポールはスキーの靴よりちょっと前に突くこと。クイックは少し前を見て登りは重心を前に。」と言う事を習いました。午後はアイススケートをしました。寮の近くのシリアン湖が凍っていてそこでスケートをしました。２，３回転んだけど、めちゃくちゃ面白かったです。

夜はロッククライミングをやりました。一回だけ上まで行って気持ちよかったです。

合宿４日目、明日あさってに大会があるので今日は軽く午前中やって午後はお土産と食料を買いに行きました。

合宿５日目、大会１日目はロングでいろんなところで細かいミスをして５～６番目はとても大きなミスをしてしまい９分も時間を食ってしまい７位になってしまいました。この日は「明日一位になるぞー」と思いながら寝ました。

合宿６日目最終日この日はショートで短いコースです。今日は霧がちょっと出ていて視界が悪かったです。ついに僕がスタートしました。スタートからゴールまでノーミスで進んでゴールしました。結果は２位に７分も離して１位でした。とてもうれしくておじいちゃんがほめてくれました。また、スウェーデンに行きたいです。

シャワー

１日目のレース終了後、シャワー好きのビヨン　グスタフソンの提案で帰路にシャワーを浴びることになった。

M12 幸のルートチョイス(太線)

夏のオーリンゲン大会の野外シャワーには度肝を抜かれた覚えがあるが、まさかいくらシャワー好きのスウェーデン人といえども野外ではないと思いしぶしぶ付き合うことにした。

着いた場所は、学校の建物で体育館に隣接してシャワールームがあった。

気温は－15℃、真っ裸になって暖かいシャワーを期待して入ったが、温水のコックを最大限に解放しても冷水が出るだけ。隣り合っている女性シャワールームからも酒井佳子、高橋美和の悲鳴が聞こえてくる。早々に切り上げたが癪の種は治まらない。ビヨンの発案で寒くてラジエーターのそばで震えている女性陣にそ知らぬ振りで声を揃えて「気持ちよかったねー」といったとたん、「ハックション！」ブルブルン？？

―レース２日目終了後―

友達が出来た

子供たちのクラスは順調にフィニッシュした様子。

若年齢参加者はそれほど多いわけではないが、クラスわけはM&W１０からそれぞれ２歳ごとに20歳まである。

10歳のクラスは、本人を先頭にして大人（保護者）が付き添いながら一人前気取りでレースをしている。

当然複雑なコースではないので程なくフィニッシュして応援したり付近を走り回って結構にぎやかだ。

表彰も若年クラスだけ、それもデプロマを省略して賞品を並べて成績の良い順にほしいものを指してもらっていくほほえましい表彰だ。

Ｍ１２で幸が１位の表彰を受けた。前日の間違ったルートチョイスと発表されたラップを検討して、スキースピードはトップのところもあったので、分岐付近を注意してレースすることにより同等に戦える自信が芽生えていた。幸はレース中、それを意識したのか致命的なミスを犯さなかったらしい。

ノーミスで速報で１位を確信した幸は、本当にうれしそうに爺爺がフィニッシュするのを待ち構えていてニコニコして報告してきた。

ローカル大会とは言えスキーＯ本場のスウェーデンで１位になるとは誰も予想しないことだった。

「ユアースピーキングイングリッシュ？」「アイドントノースピーキング」

２位になったトニーが話しかけても幸は言葉がわからない、思いついたトニーはさっき一緒に居た美和さんを探し出して通訳を頼んでいる。

トニー「途中でキミに抜かれたけどキミはスキーがうまいね」

ゆき「今日は地図をしっかり見て滑ったからピステ道はスケーティングできたんだ」

トニー「キミはジャパンだよね、ぼくのお母さんはカナダから来たんだ」

ゆき「じいじい、エリザベスさんが居ないから、あげようとして持ってきた漢字の色紙あげていい？」

＊　注：エリザベスは20年ほど前ヒュッテハイジで指導した事があり、昨日幸にキャップのプレゼントしてくれた。幸はお礼のお返しに色紙を持ってきた。

爺爺「それはいいことに気がついたね、漢字は珍しいからトニーに上げていいよ」

トニー「サンキュー、ぼく手紙書くからキミのアドレス教えてくれよ」

ゆき「美和ちゃん、ぼくの住所紙に書いてください。トニー手紙必ず書いてね、待ってるから」

トニー「書くよ。ユキ！又、どこかで会えたらいいね」

ゆき「ぼくたち、明日、日本に帰るんだ、今度はもっと大きな大会で会おうよ。そのときはライバルとしていいレースをしようね」

二人の周りには、いつの間にか大人や子供たちが取り囲み、ほのぼのとした友好的な雰囲気に包まれていた。

色紙をプレゼント。
友達になったトニー(中央)と幸（右）